いずみさの昔と今 第323回

「郷土玩具と遊び」

12月11日(日)まで開催されている「ぜんこく縦断！郷土玩具展」と関連して、郷土玩具について、テーマを変え3回にわたり紹介していきます。

今回は、郷土玩具と「遊び」にフォーカスを当てて紹介していきます。前回、郷土玩具には、現代のおもちゃとは異なり、祈りや信仰が反映されているものもあると紹介しました。もちろん、玩具としての本来の子どもの遊び道具という面も持ち合わせています。

まずは、「阿波の首人形」です。この人形には胴体がなく、木串に手捻りで作られた人形の頭を刺した玩具です。別名「串人形」とも呼ばれています。この阿波の首人形が作られている徳島県は人形浄瑠璃が盛んな地域であり、江戸時代には阿波人形芝居の最盛期を迎えました。首人形は、その人形芝居をモデルに作られており、子どもたちは首人形に紙で作った衣服を着せ、芝居をまねて遊んでいました。

古くより、貴族から庶民まで多くの人が訪れ、現代において年間多くの参拝者が集う伊勢神宮でも、伊勢参りのお土産として、「竹ヘビ」という玩具が売られていました。この玩具は、3㎝ほどの長さに輪切りした竹を針金でつないだ玩具で、尻尾の部分を持って左右に振ると、まるで本物の蛇のように体をくねらせます。

また関西地方には、竹ヘビの他にも子どもが遊ぶために作られた玩具が存在します。和歌山県那智勝浦町は、古くから鯨漁で有名な土地です。その漁師たちは、家で待つ子どもたちのために、漁の合間に、木を削り、捕鯨に用いた勢子船のミニチュアを作って、子どもに与えていました。そのミニチュアの船は、とても鮮やかに彩色されています。この彩色には意味があり、捕鯨は船団を組んで行っていたため、その船の役割が一目で分かりやすいように菊や桐などの模様が描かれていました。その模様は、ミニチュアにも描かれており、その玩具を使って、漁を再現して遊んでいたのでしょう。またそれと同時に、将来の捕鯨漁の担い手として教育の一面も持ち合わせていたのではないでしょうか。

このように、子どもが遊ぶために作られた郷土玩具は少なくありません。また、その一つ一つが、木や粘土など自然の素材で作られているのも郷土玩具の特徴です。

次回は、「郷土玩具と動物たち」というテーマで、動物をかたどった郷土玩具を紹介していきます。

▲太地の鯨船（当館所蔵）

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日　月曜日、毎月最終木曜日（いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料　無料

日本遺産・北前船文化を巡る⑧

～春日神社（石燈籠ほか）～

JAPAN HERITAGE
日本遺産

「日本遺産」に追加認定された「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～北前船寄港地・船主集落～」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

問合先　文化財保護課

▲春日神社

日本遺産「北前船寄港地・船主集落」の構成文化財である春日神社は、佐野町場の総社です。創建は宝亀年間（8世紀）と伝えられ、南北朝期に坂上正澄が社殿を建立しましたが、戦乱で焼失し、現在の社殿は江戸時代中期のものとされています。神社の入り口付近には、北前船の船主や商人が航海の安全を祈願して奉納した燈籠や狛犬が残っており、食野家・唐金家が寄進した石燈籠には、「食野左太郎」「唐金政則」など寄進者の名が刻まれています。

寄進者の名が刻まれた石燈籠▶

海岸部で開催される夏祭り「ふとん太鼓」（構成文化財）の時には、春日神社で宮入りが行われます。ふとん太鼓は野出町、新町、春日町の3町から出されるもので、瀬戸内・淡路の影響のある祭りとなっています。